

## 私と読書（その3）

校長 西藤 昌裕

年末を迎え、今年もまた自分の手帳に記された読了本の冊数を数えた。日付と書名を確認することで1年を振り返るこの作業は、私にとって大切な年末行事になっている。平成28年の手帳には140冊の書名が記されていた。今年もまた、年間100冊読了の目標を上回ることが出来た。

この1年も多くの単行本、文庫、新書を手にした。私にとっての各月のベスト作品（専門書は除く）を以下にまとめた。

1月	『ギリシア人の物語I』（塩野七生、新潮社）
2月	『ふるさとを元気にする仕事』（山崎亮、ちくまプリマ一新書）
3月	『インフェルノ』（ダン・ブラウン、角川文庫）
4月	『巨人たちの落日』（ケン・フォレット、S B文庫）
5月	『ある小さなスズメの記録』（キップス、文春文庫）（＊）
6月	『悪党の裔』（北方謙三、中公文庫）
7月	『イモータル』（萩原一、中公文庫）
8月	『満州国演義（全9巻）』（船戸与一、新潮文庫）
9月	『とっぴんばらりの風太郎』（万城目学、文春文庫）
10月	『わたしの小さな古本屋』（田中美穂、ちくま文庫）
11月	『村上海賊の娘』（和田竜、新潮文庫）（＊）
12月	『ウォールデン森の生活』（ソロー、小学館文庫）（＊）

塩野七生さんの歴史小説は年末に刊行される。『ローマ人の物語』以来、刊行年の年末年始は塩野さんの書籍とともに過ごしている。『チェーザレ・ボルジアあるいは優雅なる冷酷』（新潮社）を大学時代に初めて手にした時から40年余り、世界史授業でも度々活用させてもらった。「塩野さんはきっと神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世の小説を書くと思うよ」と生徒に話していた（予言していた）ことが、平成25年には現実のものになったときは正直嬉しかった。

小説が多いのは例年のことだけれど、近年は長編小説を読むことが多くなっている。今年は、ケン・フォレットの大作、船戸与一の遺作、北方謙三の南北朝ものなどを読了した。年齢を重ねると、ゆったりとした時間の流れの中で、長編を読み進めていく忍耐力も養われていくようだ。大学時代に手にしながら挫折した『失われた時を求めて』（プルースト）などの小説や『純粹理性批判』（カント）などの哲学書も、新訳でならば、現在ならば、読めそうな気がしている。

高校生活は何かと忙しく、なかなか本が読めないという声（悲鳴？）を聞くことがある。勉強と部活動の両立を達成するという目標を掲げている高校生活において、読書する時間を持つことはなかなか容易ではないと思う。しかしながら、昨年も記したことだけれど、一冊の本が自身の進む方向を示す、一冊の本が不安や悩みを越える力を与える、即ち一冊の本が君たちの人生を変えることが確かにすると私は思う。浜高の『読書感想文・感想画集』は、生徒の読書体験の成果を示している。ここに掲載された一篇の文章を読むこと、また一枚の絵を鑑賞することで、生徒の皆さんに新たな本との出会いが生まれることを心から期待している。

セレンディピティ、何かを探しているときに、探しているものとは別の価値あるものを見つける能力・才能を指す言葉。1冊の本を手にすることで未来が拓ける、人生が変わることもきっとあるはず。書棚から数々の書籍が君たちを手招きをしている。浜高生諸君、偶然を必然とすべく、図書館に、書店に足を運びましょう。

（平成28年度浜高読書感想文・感想画集巻頭言 平成29年1月記）